

## 私の英語学習について

生命科学部教員 M

**英語と正面から向き合うきっかけ：**私は、大学院博士後期課程在学中にアメリカの University of Maryland School of Medicine, Department of Pharmacology & Experimental Therapeutics, Toxicology Program に共同研究のために 5 ヶ月間滞在しました。これが本格的に英語と向き合った初めての経験でした。その頃の自分の英語力を思い出すと、英会話はまったくできないものの、専門分野の科学英語がなんとか読み書きできる程度でした。自分が博士後期課程 1 年生の夏、当時の指導教授から当時必要だった実験技術を学びたいならアメリカの大学に知り合いがいるから、そこへ行って勉強してきては如何かとの提案がありました。ただし、そのアメリカの大学の先生の講演ビデオテープがあるからその内容を完全に理解できたら渡米の手続きをしようと言われました。そこでそのビデオテープを何十回も繰り返し再生し、内容をレポートにまとめることに取り組みました。そして 1991 年 1 月に米国メリーランド州ボルチモアに向けて旅立ちました。サンフランシスコ国際空港に着き、国内便に乗り換え、最終目的地のボルチモア・ワシントン DC 国際空港に到着するまで英語で何を言っているのかまったく理解出来ていませんでしたが、分からないことはそのままにせず恥ずかしがらずに何度も聞き直してどうにかこうにかボルチモアに到着し、滞在生活が始まりました。大学の研究室では、英会話ができないのに読み書きは何とかできることに驚かれましたが、徐々に最低限の英会話ができるようになっていきました。もちろんテレビやラジオで何を話しているのかまではまだ分かりませんでした。研究室の仲間から、英語を話すことを恐れず、間違ってもいいから兎に角話すことが大切とアドバイスをいただき、少し気が楽になったことを覚えています。英語以外の収穫としては、アメリカの研究体制の素晴らしさに感動しました。またアメリカでは世界中から優秀な研究者が集まってきていて、国内外の力を結集して研究が実施されていることを知りました。そして日本に帰国後、博士の学位を得てからアメリカの大学で研究者修行をしたいと切望するようになりました。

日本で博士の学位取得の見込みがたったところで、海外の興味ある大学の研究室に博士研究員として採用して欲しいという趣旨の手紙と curriculum vitae (後にアメリカ人の友人から書き方を教えてもらったのですが、この書類がどれだけ大事かを痛感させられたのでした) という業務経歴書を作成するため、参考書を手許において英作文に取り組みましたが、当時はまだあまり良い参考書がなく、結局、自身でそれらしい書類を稚拙な英語で書き、何通もアメリカに送りましたが、返信がないか、あっても受け入れはないという regret の返事ばかりでした。しかしながら博士課程で取り組んでいた研究内容を論文発表したところ、思いがけず University of California, Berkeley のある研究室から job offer (契約期間、給与、待遇などが示された招聘状) の手紙が届いたのでした。博士課程の 2 年生から 3 年生にかけて論文を 2 つ程発表しましたが、ほとんど指導教授が執筆するという有様でしたが、文意が通るか、どのような順番で論述していくことが自分の主張を理解して受け入れてもらえるかについては、日本語で留意するようにしていました。また査読意見への反論も同様です。当時の自分は、まだ日本語で考えて英作文するスタイルで、時折、海外の研究者の書いた論文の一行をメモして、英作文の際にな

んとか利用（英借）するという程度のレベルでした。

**アメリカでの研究生活：**1993年9月に University of California, Berkeley に postgraduate researcher step-2 (as a faculty title) に採用され、自分の研究者生活がスタートしました。その頃は数年間修行するつもりで渡米したのですが、その後、永住権を得て15年間くらい滞在することになるとは想像もできませんでした。さて渡米前に NHK 英会話テキストを何度も勉強し、最後は日本語での解説がない skit 集を何度も繰り返し聴いて、英語に耳を慣らそうと取り組みましたが、現地ではそのような滑舌の良いスピードの遅い綺麗な発音の英語で皆が話すわけもなく、本当に相手の話す内容が理解出来ず自信をなくしたのです。初めの2週間はなんとか必死に聞き、また相手も手加減して優しい英語で話してくれましたので何とかかなりまじりましたが、それ以降、まったくダメで結局耳が慣れるまでに2年近くかかりました。とくに電話にできることが怖かったです。また会議の際に一言も聞き漏らすまいと集中しているのですが、どこかで気が抜ける瞬間があり、運悪く、自分が発言を求められる時にあたるが多々あり、周囲に迷惑をかけてしまうことがありました。聞き流しができないからです。つまり会話の要点に追いつけなかったのです。英語の聞き取りと意味の把握は、聞こえてくる順番通りに唯々受け止めていけば意味は取れるので大丈夫だということに気付きました。日本語訳する必要などまったくないのです。以前は全部聞いてから頭の中で素早く日本語に訳すという難しすぎるタスクを自分の脳に強いていたためパンクしていたのだと思います。英会話は兎に角間違ってもいいから話しまくることが大切であるとわかっていても自分はなかなか上達しませんでした。しかしながら「phrase の貯金」があれば後は伝えたいことの動詞を大きな声で言えば自分の broken English でも会話が成立することがわかりました。この「phrase の貯金」というのは、こういう時はこういう言い方をするという短い言い回しだけを頭の中にインプットしておけばよいということです。例えば、アメリカでは何でもかんでも「get」を使います。この「get」の多様な使い方を知るだけでも大きな進歩です。また少なくとも自分の意見を明確に伝えないと相手は理解してくれないということにも留意する必要があります。つまり相手の話に YES か NO かを答えられるだけでもかなりの前進だと思います。

英作文については、研究室の米国人主宰者（principal investigator, PI）からの添削を受けることに加え、プレゼンの仕方を学ぶことで力がつき、特任助教、特任准教授、特任教授兼ラボの副主宰となるに従って科学やビジネス英語の作文力はかなり上がっていきました。英語ネイティブの大学人から添削を受けることは早道になりますが、私の場合、添削された文章が自分の意図することとフィットしているか、必ず問い質すことを繰り返しました。私はこの作業により英作文が上達していったのだと考えています。研究費獲得のための申請書や投稿した論文の査読意見への反論・リプライなどはアメリカ人大学院生のお手本に使われる程になったのです。論文関連の作文では、前出のように、説明の順番、論理展開や図表のプレゼンの仕方などを英語で考えることが最も大切であり、英文そのものは副次的な要素だと思います。英作文において英語的な表現方法は知っておいた方がベターです。英文法は間違っていないが表現形態が日本語的なままの文章を書き続けるのであれば上達しないと思います（例：X interacts with the Y in two different mechanisms, which possibly reflects...ではなく X interacts in two dissimilar

mechanisms with the Y, feasibly reflecting...; There is no information for X ではなく No information is available for X; It did not change ではなく It remains unchanged; It showed a weak activity ではなく It fails to give a substantial activity; The result can be explained by... ではなく The result is attributable to...等)。英語的な表現方法を会得するには、やはり不断の努力が要ります。英語で考えて英語を書くことですし、そのためにはよく読むことです。簡単な上達の tip として、例えば、自分の主張したいことはできれば現在形（方法と結果は過去形）かつ能動態、そしてイキイキとした表現で書くことです（例：The present investigation examines a hypothesis that...; Goal of the present study is to define...; X has an unique chemical structure, thereby preferably interacting with the Y over the Z 等）。初めから過去形や受動態（例：It was resulted in...; X was shown to be...; It was suggested that...等）を使えばかなり弱い文意として受け取られるからです（もちろん、意図的にそのようにすることもあります）。もし表現を少し弱めたいのであれば、能動態の動詞の類義語から弱いニュアンスの表現を選ぶか、副詞（conceivably, presumably, in part 等）をうまく挿入することで解決できます。もちろん、弱い表現で書き副詞を挿入して少し文意を強めるとテクニックもあります。アメリカ人は子供の頃からひとつの事象を複数の表現で説明するトレーニングを受けているそうです。これは論理の構築やプレゼン法の検討のために重要であると実感します。つまり、「言い換え」ができるとう文章の幅や奥行きが変わってくると思います。また、前の3行以内にある単語と同じもの（または表現）を繰り返し使わないようにすることも大切です（固有名詞は除く）。せめて単語の言い換えができるようにすると良いのではないのでしょうか。関連として科学論文でよく使われる280語を収録した参考書を紹介します（学部4年生以上向け）。東大英単（東京大学教養学部英語部会（編著）ISBN978-4-13-082140-7）。一方、自分と家族の永住権申請の際、大学が公的費用を支払ってくれましたので、申請書類一式はすべて自分で準備することにしました（移民法の弁護士を使えば当時でも100万円以上する）。この作業もビジネス英語や公的書類の扱い方を学ぶ良い機会となりました。

終わりに：日本に帰国して15年が経ちました。英語力はかなり衰えてきたのは事実ですが、一度、外国人と英語で話す機会があれば、だんだんと貯金した phrase が蘇ってきて何とかあります。現在でも毎年論文を投稿しているので英作文力も何とか保っています（英文校閲を使ったことはありません）。唯、専門分野が今も同じであり、論文執筆時の表現がマンネリ化してきています。そんな時、やはり原点に立ち返って、何をどの順にどのように主張していくかを英語で考えることで解決しています。他方、海外に出る前にぜひとも日本の文化と歴史を正しく理解しておくことを強く推奨します。原点の理解（identity）があってこそ他国のことを深く理解できるのだと思います。私の英語は勉強して得られたというよりも on the job training によって身についたものです。昔から英語プラス専門性が大事であると言われていています。みなさんも恐れずに自分のやりたいことを英語で発信することにチャレンジしていただきたいと思います。